

「ものいう心臓」¹

「そうなのだ、神経質なのだ。とてつもなく、恐ろしいほどに私は神経質だったし、いまもそうだ。だが、だからといって、なぜ私が気違いだといえるのだ」。「ものいう心臓」の主人公はこう書き出す。彼は「黒猫」や「天邪鬼」の主人公と同じように、罪を犯して閉じこめられた鉄格子の向こうで書いている。「病のせいで私の神経は鋭敏になった。麻痺したり鈍くなったのではない。何よりも鋭くなったのは聴覚だ。私は天上、地上の森羅万象が聞こえた。地獄のいろいろなこともだ。ならば私の気が狂っているはずがあるだろうか。さあ聞くがいい。正常そのもの、冷静そのものに一部始終を話してやろう」。明らかにポーはこの話者が気違いか、少なくとも天邪鬼の犠牲者、実のところ理屈っぽい狂人であることを示そうとしている。しかし、このようにこの物語の話者はまず自分の狂気を否定する。

「どうしてあの考えが最初に脳裏に浮かんできたのかはわからない。

マリー・ボナパルト著（及川 和夫訳）

だが、いったん思いつくと、その考えは夜も昼も頭にこびりついて離れなかった」。この精神医学という強迫観念の性質はすぐに明らかとなる。「目的といったものはなかった。激情に駆られたわけでもない。父のことは愛していたし、父が私を不当に扱ったことも、侮辱したこともなかった。父の金が欲しいとも思わなかった」。このくだりは裏返しにしてみれば、ポーと養父ジョン・アランの関係の描写に奇妙に似ている。だがまず主人公が自分の行為の動機をどういつているのか見てみよう。

「それは眼のせいだと思う。そうだ、それだ。父の片眼はハゲ鷲のようだった。薄い青色の眼で膜がかかっていた。あの眼で見られると、血が凍りついた。そして次第にゆっくりと、私は父の命を奪う決心をした。そして、あの眼と永遠におさらばしよう」と。この眼は部分的に膜がかかっている、その不完全なままの膜越しに、またはその脇からものが見えたとしても、これは失明した眼球に対応

するものであり、われわれはここで「黒猫」の中心的主題に立ち返ることになる。結局のところ、この老人は黒猫と同じ理由で死なねばならない。しかし、この作品での殺人は予め計画されている。そして「天邪鬼」の場合と同じく、被害者は父親なのだ。あの作品では殺害の理由は金のためだったが、この作品では失明した眼をなきものとするためである。

「どんなにうまくことを進めたか見てもraithたいくらいだったよ。どんなに用心して、先を読み、猫をかぶって仕事を進めたかをね。なぜなら父親は実際のところ恐怖の対象であり、慎重に近づかなければならない人物だからだ。

殺す一週間前ほど父に親切にしたことはなかった。毎晩、真夜中あたりに、私は父の部屋の錠前を回してドアを開けた。そっと静かにね。そして自分の頭が入るぐらいの隙間を開けると、光が洩れないようにまわりを覆ったランプをかざして、私は自分の頭を突き出した。…ゆっくりと、そう、とてもゆっくりと父を起さないようにね。だから頭を完全に隙間から突き出して父がベッドに寝ているのが見えるまで、まる一時間かかったね。…頭が完全に部屋の中にはいると、私はランプを用心深く消した。そう、とても用心深くさ。(だって蝶番が軋むからね)。ランプの光を消したのは、一筋の細い光がああハゲ鷲の眼にかかるのを見るためさ。こんなことを延々と七回もやった。…だがいつも眼は閉

じていた。こんなことをやっても無駄だったのさ。私を悩ませたのは父ではなくて、あの凶眼だった。そして毎朝夜が明けると、私は勇敢にも父の部屋へ行って、呼びかけ、心のこもった調子で名を呼んで、昨夜はよく眠れたか聞いた。まあ、だから、毎晩寝ているあいだ十二時きっかりに私が様子をうかがっていたなんて、よっぽどの人間でない限り考えつかなかっただろう。

ここではすべてにおいて、はつきりと用心や抜け目なさの点で父を出し抜いている息子の姿を見て取れる。この若者が殺害の意図を胸一杯に秘めながら、老人の部屋へ毎朝愛想よく挨拶しながら入って行く光景を読むと、幼いポーが恐らく同じように「毎朝」、「お父さん」を訪れ、父の「名前」を呼んで、「昨日はよく眠れた」と尋ねているのを見るようだ。最近罰を受けたばかりでまったく別の感情をもっているときでさえも、子供というものは礼儀正しく愛想よく振る舞うよう強制された習慣に従っているだけなのである。

八日目の夜、いつもよりさらに用心深く私は部屋のドアを開けた。そのときの私の心は時計の分針よりもゆっくりと動いた。その日の夜まで、私は自分の賢明さがこれほどのものであると感じたことはなかった。私は勝ち誇った気持ちを抑えることができないほどだった。考えてもみたまえ、私がそこにおいてドアを少しづつ開けているのに、父は私が密かに考えていることも、やってい

ることも夢想だにしていけないのだ。そう考えると私は思わず声を出して笑ってしまったので、おそらく父に聞こえてしまっただろう。なぜなら父はベッドのなかで驚いたように突然身動きしなかった。私はたじろいだらうとお思いかも知れないが、事実はちがった。部屋は漆黒の闇に覆われている。(泥棒の予防のため、戸をしっかりと下ろしている)。だから父にはドアが開いているのが見えないのはわかっていて、それで私はそのままドアを開けた。

私が頭を突き出して、ランプの扉を開こうとすると、父はベッドで飛び起きて叫んだ。

「誰だ、そこにいるのは」。

このようにして敵対する二人は向き合った。息子の眼は闇の中でおびえた父親に釘付けになっている。「私は身動きもしなければ、何も言わなかった。まる一時間のあいだ、私は微動だにしなかった。そのあいだ、父がまた横になる音は聞こえなかった。父はベッドのうえで起き上がり聞き耳をたてていた。ちょうど私が夜ごとにやってきたように、壁の中の死の番人に聞き耳をたてていた」。次に老人の高まる恐怖が描写される。

私は長いこと待った。とても辛抱強く。しかし父が横になる気配はない。そこで私は意を決して少し、ほんの少しだけランプの

覆いをあけてみた。するとほんのほんやりとした一条の光が、まるで蜘蛛の糸のような光がそのわずかな隙間から放たれ、父のハゲ鷹の眼を照らした。

その眼は見開いていた。大きく、大きく見開いていた。その眼を見ていると、激烈な怒りがこみ上げてきた。私はその眼をはつきりと見た。一面に鈍い青みを帯び、忌まわしい膜がその上を覆い、骨の随まで寒気がした。だが私は父の顔、姿から視線をそらすことができなかった。私はまるで本能が命じたかのように、その忌まわしい場所にランプの光を向けていた。

話者は暗い部屋に拡がる光を老人が認知したのかどうかは語らない。また光があたったのは老人の良いほうの眼なのか、膜のはったほうの眼なのか、またどちらの眼が暗闇でも視力があつたのかも語らない。だがいずれにしても、膜のはった眼を直撃したランプの「蜘蛛の糸のように」細い光が引き起こした反応ははっきりしている。「世間で狂気といっているものは、じつは感覚が鋭すぎるといふことにすぎないといわなかったかな」。これはまるで偏執狂が自分の幻聴を正当化しているように聞こえるだろう。

…さて私の耳に低く鈍い、そしてせわしない音が聞こえてきた。

ちょうど時計が木綿の布に包まれているような音だ。その音にいつでも私はよくわかっていて、それは父の心臓の鼓動だ。それが

私の怒りをさらに煽った。ちょうど太鼓の音が兵士を奮い立たせるように。

だが、この殺人鬼は自分を抑え、再びしばらくのあいだ動こうとしない。ランプの「光は依然あの眼を照らし出し」、老人の心臓の「地獄の軍楽太鼓」の音は次第に大きくなる。そのあいだ、主人公の恐怖は心臓の鼓動が強くなるのにつれて高まる。

しかし鼓動はさらに大きく、大きくなった。私は心臓が張り裂けるに違いないと思った。そして新たな不安が私をとらえた。この音が近所の人間に聞こえるのではないか、という不安だ。父の最期の時がきた。大声で叫ぶと私はランプの覆いを取り払い、部屋に飛び込んだ。父は一度、たった一度だけ叫んだ。一瞬のうちには父を床に引きずりおろし、重いベッドをそのうえにかぶせた。ここまでやったところで、私は上機嫌で微笑んだ。だが何分ものあいだ、心臓は鈍い音で鳴り続けている。だが、このことは私を悩ませはしなかった。壁越しには聞こえないはずだから。やがて、鼓動は止んだ。父は死んだのだ！私はベッドを取り除けて、死体を調べた。やった、完全にくたばってる。私は手を心臓の上に置き、何分もそのままにしておいた。鼓動していない。くたばっている。あの眼に悩まされることはないんだ。

殺人犯となった主人公は自分の健全な理性を証明するかのよう
に、「死体を隠すため」の「賢明な配慮」を描写する。「夜の闇が白
み始めた。私は迅速に、しかし静かに作業をした。まず最初にした
ことは死体の解体だった。私は頭部と両手、両足を切断した」。

それから私は部屋の床から板を三枚ひきはがし、切断した死体
を床の角材のあいだに置いた。それから先ほどの床板を元に戻し
た。それはもう巧妙で精緻きわまる出来映えで、人間の眼では、
父の眼でさえ、なにも変わったことは認められなかっただろう。
洗い落とす必要のあるものはなかった。いかなる種類の染みも血
の痕も全然なかった。そんなものを残すほど私は不用心ではな
かった。桶一杯の水ですべて跡形も残らなかった。ハッハッハ…。

明け方の四時である。その時まさに通りに面したドアを叩く音が
する。「とある隣人が夜に悲鳴を聞きつけて」、警察官が捜査に訪れ
たのだった。

だが、殺人を犯した主人公はまったく冷静である。「あの悲鳴は
自分が夢を見て叫んだものです。父は…田舎にいついていないん
です…」と微笑みながら説明する。この殺人を犯した主人公は「黒
猫」(明らかにこの作品以後に書かれている)の主人公の前身と呼ぶ
のに相応しい。彼は警官らを家に招き入れ、よく搜索してくれとい
う。

ついに私は彼らを父の部屋に通した。私は父の大事にしているものが無傷で保管されていることを示した。自信の余り熱が入って、私は椅子を部屋に運び込み、この部屋で休んで疲れを取るよう彼らに勧めた。それで私はというと、完全に勝ち誇った気分であらう向こう見ずにも自分の椅子を死体が眠っている真上の場所に置いたのだった。

この場面は「黒猫」の主人公が壁を叩くのを予示している。これにはなによりも自分の犯行現場をうろつく殺人犯を思わせる。

するとその時、犠牲者が反応するのである。まるで墓の奥深くから殺害者を誘い挑戦するかのように。指令官の墓に据えられた石像はドン・ジュアンの招待を受けて、姿をあらわす。壁に塗り込められた猫は叫ぶ。心臓の鼓動を響かせていた老人もまた、独特な反応を示す。「警官たちは満足していた……。彼らは席につき世間話をし、私は快活に受け答えをした。だが、ほどなくして私は自分が青ざめていくのを感じ、警官たちに帰ってほしいと思った。頭が痛み、両耳には音が鳴り響いているように思った」。音は高まり。「ついに、その音は自分の耳の内部で鳴り響いていてのではないことがわかった」。こうして幻聴が再び始まる。

明らかに、私はひどく青ざめていた。だが、口調はいっそう滑

らかで、声も高揚していた。だが、あの音はますます大きくなる。どうしたらよいのだろう。それは低く鈍い、そしてせわしない音だ。まるで木綿の布に包まれた時計のような音だ。私はあえいだ。だが、警官たちには聞こえなかつようだ。私はいっそう速く、猛烈に話し続けた。だが、あの音はますます大きくなる。私は立ち上がった……。

このみじめな男はますます大きくなる音を掻き消そうと、いっそう激しい努力をする。だが大股に重い足どりで床の上を行ったり来たりしたり、自分の椅子の足を軋ませたりしても無駄である。「音はだんだん大きく、大きく、大きくなる。だが警官たちは楽しそうにおしゃべりして笑っている。あいつらが聞こえないなんていうことがあるだろうか。まさか、そんなことはあるわけがない。聞こえているんだ。疑っているはずだ。やつらは分かっているんだ。それでいて、俺が恐がっているのを嘲っているんだ」。

そして主人公は幻想の帝国の住人となり、もはや嘲られるのに耐えきれなくなり叫ぶ。「やい、悪党めら、ごまかすのはもうやめろ！ 犯行は認めるぞ。その床板を引きはがしてみろ。そら、そこだ。鳴り響いている、奴のおぞましい心臓はそこだ」。

以上が「ものいう心臓」の概要である。この作品はポーの物語のなかでもっとも直接的で、余計な装飾の少ない、それゆえ「現代的な」好みに最も近い作品であろう。この作品は、ドストエフスキー

の作品⁽²⁾のような偉大な父殺しの時代の先駆といえる作品である。

* * *

ポーは「ものいう心臓」について一八四二年十二月付けの書簡⁽³⁾中でふれているが、従来この作品は彼自身の深刻な心臓発作の影響と想い出が明らかに創作の刺激になったのだらうと指摘されてきた⁽⁴⁾。その発作はサラトガ・スプリングズから戻った、同年の夏に向かう頃の出来事である。ハーヴェイ・アレンによれば、おそらく、この深刻な発作は一八三四から五年にかけての最初の発作から数えて、三回目の発作であり、これから解明する深く隠匿されたコンプレックスを表現するために、ポーがまさにこの苦悶に満ちた心臓の鼓動という語法を選択した誘因となっている。この同じ手法をポーは後にも使うことになる。それは心臓の状態がさらに悪化してからのことで、「アニーへ」という詩で生の倦怠を表現するために使っている⁽⁶⁾。だが、この程度の説明で、「ものいう心臓」という作品に込められているものをすべて語り尽くしているとは到底いえない。

精神の意識的な働きで把握するのは難しいが、肉体器官の機能は生命に対する重要性に比例する形で無意識に現れるわけではないことをわれわれは現実的に知っている。特に心臓の鼓動は生命にとっては決定的に重要であり、鼓動が停止すれば死が訪れる。したがって、心臓の活動は心理に大きく反映すると想像する人もいるだらう。

しかしながら、実際は全くそうではない。心臓の鼓動は、呼吸するときの胸郭の定期的な運動同様、無意識を悩ませることはない。両方とも、肉体器官の領域で通常的に活動する自律神経に属するものであり、心理上の無意識の側でも同様のものと見なされる。

だが、もし万一ある一時的な器官障害か、またはヒステリー、あるいは心気症に由来する転換神経症の影響で、どこかの重要な器官の障害を引き起こした場合はどうだろう。それらはきつと一番の関心事になるであろう。だが、それは器官の単純な機能それ自体に純粹に生じているわけでは決していない。その時、それらの器官はリビドーの負荷を負わされているのである。そうした場合、そのような負荷を負わされた器官は、本来の機能とは別に、生命体全体のリビドーの機能を表象するのである。なぜなら、リビドーの機能が大部分、その器官に「転移」されているからである。心気症を引き起こすほどの重度の自己愛的退行とは決していえないような精神神経症の障害の場合、リビドーを負荷され病んでいる器官は、主体の他者に対する客体的関係を表現するのに使われることさえある。

ポーの「ものいう心臓」の場合もこれが当てはまる。すでに今まで示してきたように、殺害された老人はいくつかの点でジョン・アランに似た特徴をもっている。苦しい心臓疾患の症状自体が彼のものにはかならない。彼に水腫症の最初の発作が起きたのは一八二〇年、イギリスに滞在中のことだったのではなかったか。その病気は年とともに悪化し、一八三四年に彼の命を奪うことになったのでは

なかつたか。読者は父と養子ポーが最後に対面したことを思い出すであらう。そして水腫症患者の父は屋敷への侵入者であるポーに、その杖を振り上げたことを。殺害された老人の胸の中で脈動する心臓を恐れるということは、このように明らかに、水腫症を病み、圧迫され、障害を起こしている、このスコットランド人商人の心臓にその直接の原因がある。さらに、あとで検討する奥深いコンプレックスの影響と、息子によくある父との自己同一化によって、ポーは神経症とアルコール中毒を病む自分自身の心臓と父の心臓をあとで時々同一視するようになる。

しかしジョン・アランが水腫症を患っていたという事実だけで、この不安に満ちた物語の実質的内容のすべてが説明されるわけではない。人を夢へ、芸術家を創造へと駆り立てる、深遠な動機を理解するには、無意識にうごめく原始的な生の本能のすべてを十全に把握する必要がある。

「モルグ街の殺人」や「群衆の人」に関してすでにみたように、子供の性本能は大人が考えるよりもはるかに早くから目覚めるものである。信じられないような幼い頃から、子供はすでに予め形成された本能のメカニズムを所有しており、それでもって目撃できた大人の性行為を記憶する。子供時代のポーが不幸な旅役者であった母と同じ部屋を短期間使っていた頃、そのような行為を目撃したことは、オラウータンの犯した犯罪を考えてみればほぼ確実である。その犯罪はロンドンの霧に隠された。母フランシス・アランが不可思

議な病気にかかったときも同じ霧がかかった。そのため、「群衆の人」は「深い罪の象徴であり、精髓」と描写されるのだ。なぜなら、性的行為が加虐的なものに思われる年頃の子供にとって、母親に対する性的な攻撃はあらゆる罪の原型だからだ。

しかし子供がまだ十分幼く、大人たちが自分たちの性行為が明らかになるのを時には恐れない場合でさえ、大人が見通すことができなないと考える闇の覆いでもって、目を覚ます可能性がある子供の視線から自分たちの姿をすぐに防御する。「ものいう心臓」で、その闇は活写されている。闇は部屋を「漆黒のよう」にすることができ、この闇は何よりも、性的戯れのための文明人の好む舞台であり、社会の非難が性的行為をその周辺に追いやる。

しかし、子供の目覚めた性本能は闇の彼方から、依然としてそれを知覚、記録することを止めない。子供がそれ以前に眼にしたことが手助けになることもあるし、また見えなくても物音だけで十分である。実際、性行為には独自の決まった音や、リズムミクナ動き、せわしない息遣いが伴い、心臓の鼓動の高鳴りが比例する。心臓の鼓動は離れていれば聞こえないかも知れないが、あえぎ声というのがそれに伴っており、そのたびに心臓の鼓動を喚起するので、夜の静寂の中で神経を尖らせている子供の耳には奇妙によく聞こえるものである。

したがって、「ものいう心臓」のなかで、超自然的なまでに鋭敏な聴覚が語られているが、驚くにはあたらないのである。明らかに

ここには、夜の「地獄のような」出来事を知ってしまった、あらゆる子供の無意識の記憶がある。それは父親の母親に対する性的な攻撃である。似たような無意識の記憶は偏執狂の幻聴の多くの事例の根底にみられる。

老人の心臓の鼓動、「だんだん速く、だんだん大きく」なる「地獄の軍楽行進」は、かくして性行為における女性への攻撃と、このうえないその喜びに対して投げかけられた心臓の突撃のかけ声であろう。物語では、この心臓の鼓動の高鳴りは明らかに二度繰り返されている。最初の絶頂は老人の死に至り、二度目は主人公の逮捕につながる。これもまた死に至るが、今度は殺人犯である主人公の死だ。かくして、復讐の掟は二度満たされる。最初は母親を殺した者への罰によって、二度目はその殺人者を殺した者への罰によって。

かくして結局のところ、当然の罰を受けているのは、「ものいう心臓」の老人のベッドに寝ている「群衆の人」である。精神症の症状では、抑圧されているものは、まさにその抑圧の過程そのものから最終的に姿を現す。この作品では、犯罪の兆候である、快楽に高鳴る心臓は、報復の罰を受け、死の苦悶で鼓動する心臓という姿で再登場する。

そのうえ、老人は彼の罪である性的な攻撃をおこなった舞台、すなわちベッドの下敷きになって窒息死する。このように犯罪の手段がそのまま罰の手段となるのである。

また老人、というか老人の鼓動する心臓が眠っているのは深い闇、

それも漆黒のような闇である。その闇を主人公は覗き込み、ランプの光を差し込む。これは明らかに、暗いにもかかわらず、何が何でも見たいと思った子供の頃の激しい願望がそこに反映していると解釈しなければなるまい。ある若者を知っているが、彼が両親の性行為を目撃した記憶は、自分の眼ではなく、カメラのレンズの絞り越しに、小さな姿で自分が目撃している情景を見るという形の夢で現れていた。ポーの時代にカメラは発明されて日が浅かったが、この「ものいう心臓」では、ランプが視線の象徴であるカメラのレンズに代わっている。原始的な視覚の概念では、光を発する物体が眼に光線をおくるのではなく、逆に眼のほうが見る対象に光線を放射すると言われている。こういった原始的な視覚概念は、ランプの覆いを覗くように半開きにして暗闇を見るところというやり方に暗黙の形で見られる。物語のこのような要素と、中心的な主題である心臓の鼓動を関連付けるならば、かつて母親エリザベスとの生活で見たかもしれない性的な場面に対する、視覚聴覚両面での郷愁が少年時代のポーにわだかまり、アラン家での生活のあいだも持続していたことが全面的に反映しているのが分かるだろう。

* * *

だが、この物語で息子にあたる人物が父親にあたる人物を殺す理由は、まったく別である。話者は「父のことを愛していた」し、父

は自分を「不当に扱った」ことも、自分を「侮辱した」こともないとはつきり述べている。そして、父親の「金」に関しては、まったく欲しくはないという。すでに見たように、ポーと「父さん」、ジョン・アランの関係とはすべてが逆である。⁸⁾ ここには恐らく、ある種の偽善がある。この作品はまず第一に憎悪の物語であり、息子の父へのアンビヴァレントな感情が現れて当然だろう。だが、作品の中で述べられている若者が老人を憎悪する理由は独特である。老人を憎む理由は眼のせいだというのだ。「それは眼のせいだと思う。そうだ、それだ。父の片眼はハゲ鷲のようだった。薄い青色の眼で膜がかかっていた」。

ここでハゲ鷲に言及されているからといって、母親を指しているのは議論の余地がないと断定してはならないだろう。確かに、ハゲ鷲はエジプト人の古典的な母親象徴であり、後世ではレオナルド・ダ・ヴィンチの少年時代のハゲ鷲幻想にやはり母親の象徴を見ること⁹⁾ができる。だが否定できないことは、老人の眼球は「黒猫」の母親のトーマスである猫の眼球と直接的な関連があるということだ。確かに眼を膜が覆っているということが決定的に視力がないということにはならないが、一般的にそういう場合が多いし、少なくとも視力喪失の暗示とすることができる。言葉をかえていえば、ゲルマン神話のヴォータンのように、「ものという心臓」の父親は片目が見えないとされている。これは去勢されているというのに等しい。¹⁰⁾

これは明らかに罪ゆえの去勢である。父親というものは、母親に

関していえば、あらゆる罪の原型である。これは息子に關しても同様である。去勢の脅威を振りかざして、母親を息子から遠ざけたのは父親ではなかったか。しかし、困難な問題がまさにここにある。母親がその肉体によって息子に男根喪失というおそるべき可能性が存在することを教えたとすれば、エデップスの禁忌を産みだしたのは結局父親であり、また父親のためであった。そして古代から、また無意識の深みから、疾しい欲望を抱くと去勢すると脅したのも父親であった。父親がこういった罪を息子に犯したがゆえに、息子のほうが父親に去勢で復讐するのである。これは息子の側が犯せば去勢されていたかも知れない罪を父親が犯したがゆえの報復である。その罪とはすなわち母親を所有したという罪である。かくして、ゼウスは成人すると、父クロノスを去勢した。そして、クロノス自身もそれ以前に自分の父であるウラノスを去勢していたのである。

以上がポーのこの小品の根底に根深く存在し、その卓越した力を与えている二つの偉大で永遠に人間的な主題である。あらゆる人間が、すべての子供が通過しなければならぬ二つの大きなコンプレックスがこの作品の精髓であり、実質なのである。父の死を願う息子のエデップスの願望が実現する。父は打ち倒される。それは母を所有した罪と、忌まわしい去勢をこの世界に導入した罪のためである。去勢の呪いは第一には息子にたいする脅威として現れるが、なによりもそれを実行したがゆえに父は打倒される。なぜならば、息子は母親に男根がないことを発見したとき、一般にその去勢の責任

は父親にあると考えるからである。両親の性的行為をはっきりと記憶にとどめている子供は、母親が父親の加虐的攻撃に屈服しなかったとしても、代償として少なくとも手傷は受けただろうと想像する。そして、その傷はアムフォルタスの傷のように永遠に血を流し続けるだろうと考えるのだ。子供が気づくことが避けられない、女性の月経がその証拠となる。去勢さえなければ、あらゆる人間は完全無欠の存在であった。だが、このように、この世界に去勢をもたらしただ大罪にたいして、両親の双方がともに責任がある。つまり、母親は去勢を受け入れてしまったという責任であり、父親は去勢を加えたという責任である。それゆえ、両親の双方が罰を受けなければならぬ。猫は縛り首にされ、壁に塗り込められる。老人はベッドの下敷きにされ窒息死させられる。両方とも同じ罪の象徴を示している。猫の片目は抉り取られており、老人の片目は膜が覆っている。さて、ここで「ものいう心臓」の老人の膜がかかった眼が果たして見えなかったのか検討すべきであろう。ポーは明確に記してはいない。しかし、膜がかかっていたにもかかわらず、視力はあったと暗に述べているように見える。なぜなら作品の冒頭に「あの眼で見られると、血が凍りついた」と書かれている。また殺害後に、切断した死体を床下に埋めたあととところで、こう書かれている――「人間の眼では、父の眼でもってさえ、なにも変わったことは認められなかっただろう」。ここでは途方もない視力が父親の眼に与えられている。だが、これは幾分矛盾している。なぜなら少なくともポー

の無意識のなかでは、その眼は膜がかかっているにもかかわらず視力があるとしても、神話の父なる神ヴォータンの眼と同じく、その眼が盲目なのは議論の余地がないからだ。

だが、ご承知のように、夢や神話の表面的な内容の矛盾は、別個の完全に一貫した、潜在している思考の内容を表しているものだ。いま眼球と膜の関係には矛盾が存在する。それは並外れてすべてが見えるにもかかわらず盲目である。この矛盾は、作品中の父親はまったく違う二つの罪によって罰を受けているという事実¹に由来するのではないだろうか。つまり、第一の罪は母親と性的行為を行ったという罪であり、第二の罪はその結果、母親の肉体が示すように、この世に去勢を導入した罪である。この去勢を導入するには武器が必要であり、それが男根であった。したがって、この行為を行う瞬間には、父親は去勢されてはならない。そして父親はこの罪の罰として、あとで去勢されるのである。したがって、見えるけれども見えない老人の眼という明らかな矛盾は、罪を犯した父親の二つの時間的に連続した側面を一つに凝縮しているのである。まず第一には、犯行に使用した武器としての男根という側面であり、第二には、その罰として切断された武器としての男根という側面である¹。

* * *

「ものいう心臓」よりも少し前に書かれたポーの作品で、父親の

去勢のモチーフがいつそう純粹な状態で現れ、去勢の苦痛がかならずしも死の苦痛と結びつかない作品がある。それは「使いきられた男」^⑩という作品である。そのなかに登場するジョン・A・B・C・スミス准将はまさに男盛りの絶頂であり、あらゆる生命の力を保持している。彼は野蛮なキッカポー族、バツガブー族と壯絶な英雄的戦闘を練り広げるが、彼らによって肉体のありとあらゆる部分を可能な限り切断される。物語の話者はスミス氏と社交界で出会い、彼の立派な風采、美しい声、その落ち着きに幻惑される。スミスはとりわけご婦人たちには大もてである。しかしながら、彼にはなにか秘密があるという噂がささやかれている。それがどういいう性質のものか話者には分からない。万策尽きて、話者は真実の源を探るべく、ある晴れた日の朝、スミス氏の自宅を訪問する。スミス氏はまだ化粧室にいたが、話者は家に招き入れられる。部屋に入ると、彼はかすかに声のようなものを発する、形の定かではない荷物のようなものに蹴躓く。それは現代科学技術の粋を結集して作り上げたさまざまな人工の装置を外した状態のスミス氏の姿であった。そういったもので彼は切断された肉体を補助していたのだ。切断されたもので最も重要なものは何であったかは述べられていないが、その肉体の切断が十分なものであったことは察しがつく。なぜなら、キッカポー族とバツガブー族はご丁寧にも、手足、両肩、胸の筋肉、頭皮、歯、眼球、口蓋、舌の八分の七を切りとってくれたのであるから、当然彼の男根をそのままにしていたはずはない。おまけに、

キッカポー族やバツガブー族のような野蛮な民族においては、捕虜の男根切断という行為は非常に栄光ある位置を占めている。

「ものいう心臓」の主人公も被害者を床下に埋める前に頭部と手足を切断したが、彼が「去勢」したのは死体にすぎない。それにたいて、スミス氏が受けたのは純粹に象徴的な形での去勢であり、しかもそこには死が除外されている。去勢（男根の剥奪）の主題は死（生命の剥奪）の主題（生命の剥奪）に属しているが、この二つの主題は同一ではない。「使いきられた男」がそのことをよく示している。

さらにこの作品には、ポーの軍隊時代の生活、つまり父親ジョン・アランから逃げだしたはずなのに、軍の上官が父親の位置を占めていた時代の伝記的な反映を見ることができると、

* * *

この「ものいう心臓」の研究を終える前に、殺された老人の特徴と、少年時代のポーのまえにあらわれた一連の父親像の特徴の違いを考察してみよう。

すでに見たように、両親の性的行為に付いてのポーの無意識の記憶は、実の母がブラシッド一座との巡業中、彼女と部屋をともにしていたときにさかのぼる。当時、彼の父はデイヴィッド・ポーであったが、恐らく母のベッドには愛人がすぐにとつてかわったはずだ。

あの不思議なX氏、ロザリーの父である。恐らく、だんだん激しくなる心臓の鼓動という主題は、第一にはこの正体不明の愛人が与えたものであろう。そして、最終的に主人公が老人の部屋に突入するさいに、彼は咳払いをしたり、ランプを操作している。これらの中断した行為は自分の存在を明らかにしたいという願望を暗に表しているが、さらに別のよくある出来事を反映しているともいえる。すなわちそれは、興奮を感じとったか何かした影響で、聞き耳を立てていた子供が嫉妬し、泣くか尿意を伝えるなどして両親の性的行為を中断させようとしたことである。

こういった印象はすべて非常に幼いうちに蓄積され、以後も存続した。しかしジョン・アランと過ごすようになって、それらは一丸となって彼に転移されてしまった。彼は非常に威圧的な父親であり、その荒々しさは成長期のエドガー少年に消すことのできない刻印を残した。おそらく、このスコットランド商人の中産階級の家庭において、ポーの幼く、早熟な性の目覚めは強制的に抑圧されたのは明白である。この時期にポーは道德の源泉である去勢コンプレックスに苛まれていた。したがって、膜がかかった眼、ハゲ鷹のような眼というのは、実はジョン・アランの眼なのである。少年ポーのエドプスの憤怒を一身に浴びるべきはジョン・アランにほかならない。それは彼が荒々しく抑圧的な、現に実在する父親であり続けたからである。また彼が新しい母を所有し責め苛んだからだ。老人の心臓の鼓動は三重の意味を担っているように思われる。第一には、

もしその鼓動が、宿泊先での夜に偶然遭遇した、哀れな役者から発せられた、性的行為の喘ぎ声をあらわしているとする。その喘ぎ声は苦しい心臓の記憶の影響を受けて、水腫症を病む父ジョン・アランにまず始めに転移した。だがそれは現実には、神経症でアルコール中毒の息子ポーの心臓に反響しているのだ。しかしこの二人の病める心臓はともに罪深い心臓であり、実は同じ罪を犯しているのだ。それは母親に欲望を抱くという罪である。この病は高鳴る心臓と同じく、ポーの無意識にとつて罪と罰の両方を同時にあらわしている。主人公は強迫的に夜ごとランプを手に老人の部屋のドアを開け、一人でベッドに寝ている老人を見る。これも子供時代のポーのより現実的な、より伝記的な記憶が反映しているはずである。ジョン・アランは妻が旅役者の孤児を養子にすることを好まなかった。彼が、たとえポーが病気の時でさえ、子ども時代のポーが夫婦の寝室に寝るのを許したとは考えにくい。たとえそれが可愛い赤ちゃんに夢中な妻を喜ばせるためであったとしても。おまけに、アラン家は安楽な中流階級の邸宅であり、奴隷さえ所有していた。その黒人奴隷の気立ての良いもの、すなわち彼の「ねえや」にポー少年は託され、彼女の傍らで彼は寝ていたはずである⁽¹⁵⁾。

たぶん、この黒人女性を通じて、「漆黒の」夜に、彼女の肌の色のように暗い夜に、彼は両親の性行為を追体験したのかもしれない。それは彼が闇の中で聞くことしかできなかったものだった。丁度、ランプを持った主人公が老人の心臓の鼓動に聴き耳をたてるよう

に。だが、ポーの伝記でも作品でも黒人女性はその証言となるような役目を何も果してはいない。少年ポーの性欲はそのころまでには、強制反復の古典的なメカニズムによって、自分の実の母と同じく白く美しい養母に固着していたのだろう。夜眠りに落ちてから、少年ポーのさまざまな欲望が一点に凝縮したのは、養母の部屋に違いはない。それは彼が養母を愛し、欲望したせいでもあり、また嫉妬心のせいでも、そこで「他人」がしていることを見たいと一心に願ったからでもある。

その「他人」とはジョン・アランであり、彼こそは実の母になされた記憶している性的な攻撃を行った犯人であると、少年ポーは疑っていたに違いない。主人公はランプを手にし、夜ごと老人の寝室に見に行くよう急ぎ立てられている。これは明らかに少年時代、意に反して、乳母に子ども用の小さいベッドに寝かせられたためできなかったことを実行しているにすぎない。「群衆の人」と同じく、この作品でも母親のイメージは削除されているが、まず父親が片目であるのも、次に殺されるのも母親のためにはほかならない。

エデップスの闘いの争点は父親の死であり、その褒美は母親である。だが母親は物語や情景から削除されており、老人はベッドに一人で現れる。丁度、ジョン・アランが永久に一人で眠るように少年ポーが願ったように。孤独に眠る老人の姿には、少年ポーのかつての願望的な夢想が真実味をもって反映している。

だが、一人で寝ているとはいえ、老人の心臓の鼓動は次第に高鳴

る。このようにして、その姿には父親の性的行為に対する否定と肯定が一つの存在に同時に凝縮される。それは父親の眼が男根の存在と不在を同時に想起させるのと同じである。こういった表現様式は無意識にとつては自然である。というのも、無意識には対極のものが踵を接して共存しているからである。意識的な論理が否定しようとも、それらはわれわれの深層につねに隠れている。正常者の夢も、神経症患者の夢もそれを止むことなく繰り返し証明しているし、人間が産みだしてきたすべての神話もまたそうなのである。

註

- (1) 「ものいう心臓」『バイオニア』一八四三年一月号、『フロドウェイ・ジャーナル』第二巻七号。ポードレル『新異常な物語』(一八五七年)。
- (2) フロイト「ドストエフスキーと父殺し」『国際精神分析ジャーナル』(一九四五年一卷八号)。「ドストエフスキーと父殺し」『全集』第十四巻(一九二八年)。
- (3) 「ローヴェル、ポー宛書簡、ボストン、一八四二年十二月十七日」ヴァージニア版全集、第十七巻、一二五頁。
- (4) ハーヴェイ・アレン『イスレフェル』(ロンドン、プレントナー、一九二七年)、五六七頁。
- (5) 前掲書、五四〇頁。
- (6) うめき声も、うなり声も
ため息も、すすり泣きも
今は静まりぬ。
あの恐ろしい心臓の
鼓動のために。ああ、あの恐ろしい
恐ろしい鼓動のために。
- (7) アンリ・バルビュス『地獄』(パリ、モンディアアル書店、一九〇八年)参照。この作品では性的なもの一般が「地獄」と同一視されている。
- (8) 同様に、「犯人はおまえだ」『ゴードイーズ・レイディーズ・ブック』一八四四年十二月号)では、貧乏な三文作家で、名前もその通りベニフェザー氏という人

物が登場する。彼は裕福な叔父シャトルワージェイ氏の相続人であるが、叔父の殺人事件に関してはまったくの無実である。そんな恐ろしい行為に手を下した人物は、ベニフェザーの分身で、オールド・チャーリー・グッドフェローという皮肉な名前を持つ悪者だけである。この人物は一連の「父親像」、偽善的なジョン・アランの分身の系譜に属する。グッドフェローは首尾よく、無実の甥ベニフェザーを逮捕させ、絞首刑の判決を宣告された罪人に仕立てるのに成功するが、典型的にポーらしい手口で(被害者の死体がワインの木箱から起き上がり、真犯人を断罪する)、彼の罪は暴かれ、司直の手に委ねられる。犯人グッドフェローは倒れて死ぬが、ベニフェザーのほうは監獄から解放され、殺された叔父の財産を無邪気に手にいれる。

(9) フロイト、「レオナルド・ダ・ヴィンチ―幼児記憶の性心理学的研究」、前掲書、三八二頁、註四。

(10) 『ブリタニカ百科事典』の「オーデン」の項目によれば、古代の部族では戦で捕らえられたものはしばしば「片目の老人」に犠牲に捧げられた、とある。「犠牲のもつとも一般的な方法は犠牲者を木に吊るすというものであった。そして詩『ハヴァマル』のなかでは神自身が同様に犠牲になったとされる」。去勢された父親像であるヴォータンが木に吊るされる。つまり言葉をかえると、やはり片目の化け物である黒猫と同じように疑似的に男根を回復するという事実には、偶然の一致という以上のものがあるはずである。

(11) 別な矛盾を指摘できるかも知れない。老人の心臓の鼓動は時計の、「木綿の布に包まれた」時計の針の音に例えられていた。時計、ないしは時計の針の音は(後に考察する、威圧的な時計の振り子とは対照的に)、無意識においては、女性器やそこに隠された小さなクリトリスが性的に興奮した時のわななきの古典的象徴である。老人の心臓の鼓動が高まり、「地獄の軍楽行進」という実に男性的な特徴を帯びる以前に、鼓動は二度響き出す。それは籠もった、「女性的な」響き方であった。これも見ると同時に見えない膜のかかった眼と同様の二重性の実例といえるかもしれない。それはすなわち、言葉を代えていえば、超男性的であると同時に、去勢されているということである。

(12) 「使いきられた男―バグパー族とキッカパー族への先頃の遠征の物語」『パー-tonズ・ジェントルマンズ・マガジン』一八三九年、一八四〇年、一八四三年、八月号、『プロードウェイ・ジャーナル』二巻五号。

(13) この「黒人のねいや」に関しては『イズラフェル』、六一頁参照。

【解説】

本論文はマリイ・ボナパルト著『エドガー・ポー―生涯と作品―精神分析的研究』(全三巻、一九三三年)の第三巻『物語―父親の物語、ポーと人間の魂』冒頭の「ものいう心臓」の章の全訳である。

著者のマリイ・ボナパルト(一八八二―一九六二)はフランス皇帝ナポレオン一世の姪の娘で、ギリシアのジョルジュ王子と結婚し、ギリシア王女、のちにデนมーク王女となる。シグムント・フロイトの高弟となり、自らも精神分析医となる。フロイトの研究所に資金援助をし、ナチの台頭の際には彼の逃亡を助けた。本書は精神分析的文学批評の古典的大著であり、ポーという複雑怪奇な作家の内面に鋭く迫っている。特に老人の並外れてすべてが見えるが、盲目の眼の解釈は卓抜である。底本にはEdgar Poe, sa vie et son oeuvre, *Étude analytique* (Paris: Presse Universitaires de France, 1958) を使ひ、英訳 *The Life and Works of Edgar Allan Poe: A Psycho-Analytic Interpretation*, trans. John Rodker (London: Imago, 1949) を参照した。